

双六・蓑谷の滝と地質



図1 観察地点案内図（地理院地図（HP）に加筆）

【日時】平成31年11月30日（土） 午前9時集合

【集合地】国府文化交流センター駐車場

【日程】国府文化交流センター → ①昇神の滝 → ②百間滝 →
9:00 9:40～10:40 11:00～12:00

双六入口（昼食） → ③鼠餅の大滝 → ④蓑谷の三滝 →
12:20～12:50 13:10～13:30 13:50～14:20

国府文化交流センター（時間があれば、岩舟の滝、三休の滝も見学）
15:00



図2 双六谷の観察地点と地質（地理院地図HPに加筆、地質はジオランドぎふHPによる）

① 昇神の滝

双六川の支流、井口谷にかかる落差約 30m の滝です。かつて遊歩道があったようですが、今は道が定かでない箇所があります。『ぎふの名瀑名峽』によると、滝の上部は隠洞という地名で、その昔、神様がこの滝を昇ってお隠れになったという伝説から昇神の滝といいます。

滝は、上宝火砕流の溶結凝灰岩を流れ落ち、滝の下部には、花崗閃緑岩があります。溶結凝灰岩は、花崗閃緑岩に比べ崩れにくいいため、その境付近に段差ができて滝になっています。

上宝火砕流堆積物は、約 65 万年前、高山市奥飛騨温泉郷の福地南方にあった火口から噴出しました。大量の火砕流堆積物は、その自重と熱さで溶け直して溶結作用を及ぼし、しばしば溶結凝灰岩という岩石になります。一方、花崗閃緑岩（花崗岩）は、地下深いところでマグマがゆっくり結晶して岩石となったものです。岩石を作る鉱物が大きめで風化しやすい性質があります。この花崗閃緑岩は、船津型花崗岩といい、少なくとも数億年前にできたものです。（小井土、2011 など）



写真1 昇神の滝

② 百間滝

双六川の支流、山吹谷にかかる落差約 25m の滝です。大規模林道が谷を横切るの橋の近くにあり、国土地理院の地形図にも名前があります。水量の少ない時なら、谷の入口から簡単な沢登りで到達できます。一間とは、昔の長さの単位で約 1.8m になります。すると百間は 180m です。滝の名前の由来は定かではありませんが、全国的にもその面積や長さが大きい意味で、百間平や百間滝などという地名があります。

滝は、船津型花崗岩の花崗閃緑岩を切っています。山吹谷を大規模林道が登っていますが、特に滝のある登り口付近は急峻になっています。本流の双六谷に比べ小さな山吹谷は、下方侵食が相対的に小さいため、双六谷の河床との間に落差ができて滝になったといえます。



写真2 百間滝

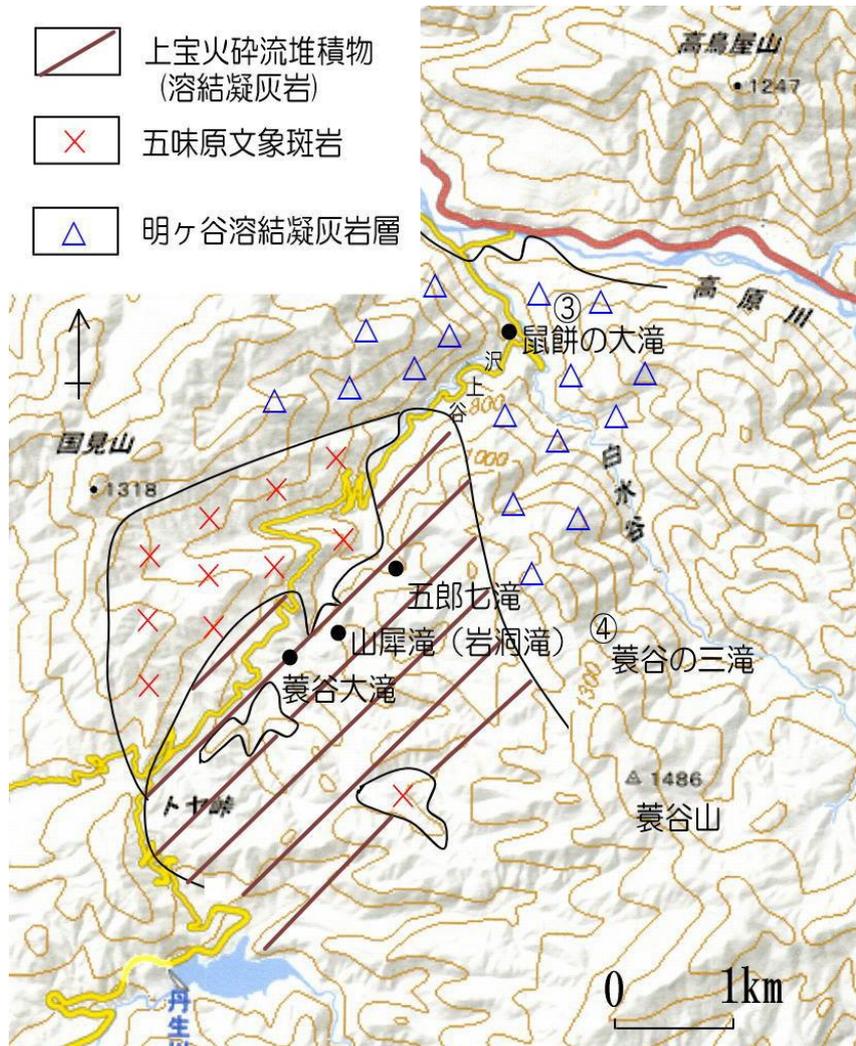


図3 蓑谷の観察地点と地質（地理院地図HPに加筆、地質はジオランドぎふHPによる）

③ 鼠餅の大滝

鼠餅は高原川沿いの地名ですが、鼠餅の大滝は、沢上（そうれ）谷の最下流にあります。沢上谷は、白水谷に合流しますが、その後白水谷は1km流れ高原川に合流します。国土地理院の地形図では単に大滝と記してあります。合流地点の橋の上流に向かって右側を下りて30mほどで滝の近くに行けます。高さは20m程度ですが、沢上側の上流側から観察すると2つ以上の滝が連続しているようです。橋から降りて見た滝は、一番下の滝を見ていることになります。

江戸時代の書、『飛州志』によると、「鼠餅瀧、此の山、神馬に乗って滝のあたりを遊行すると適響の音が聞こえる」とあり、この滝に当てはまります。

滝付近の岩石は、明ヶ谷溶結凝灰岩層といって火砕流起源の岩石で、大雨見山層群の一部です。大雨見山層群は、中生代白亜紀末期（約7000万年前）に火砕流を伴う激しい火山活動でできた地質です。

沢上谷と白水谷の接続部では、白水谷の河床が低いために、沢上谷側が滝になりました。白水谷の河床が低い理由は、この谷が相対的に長く大きいため、約1km先の高原川の河床の低下に連動して、川底を低く侵食したからです。



写真3 鼠餅の大滝

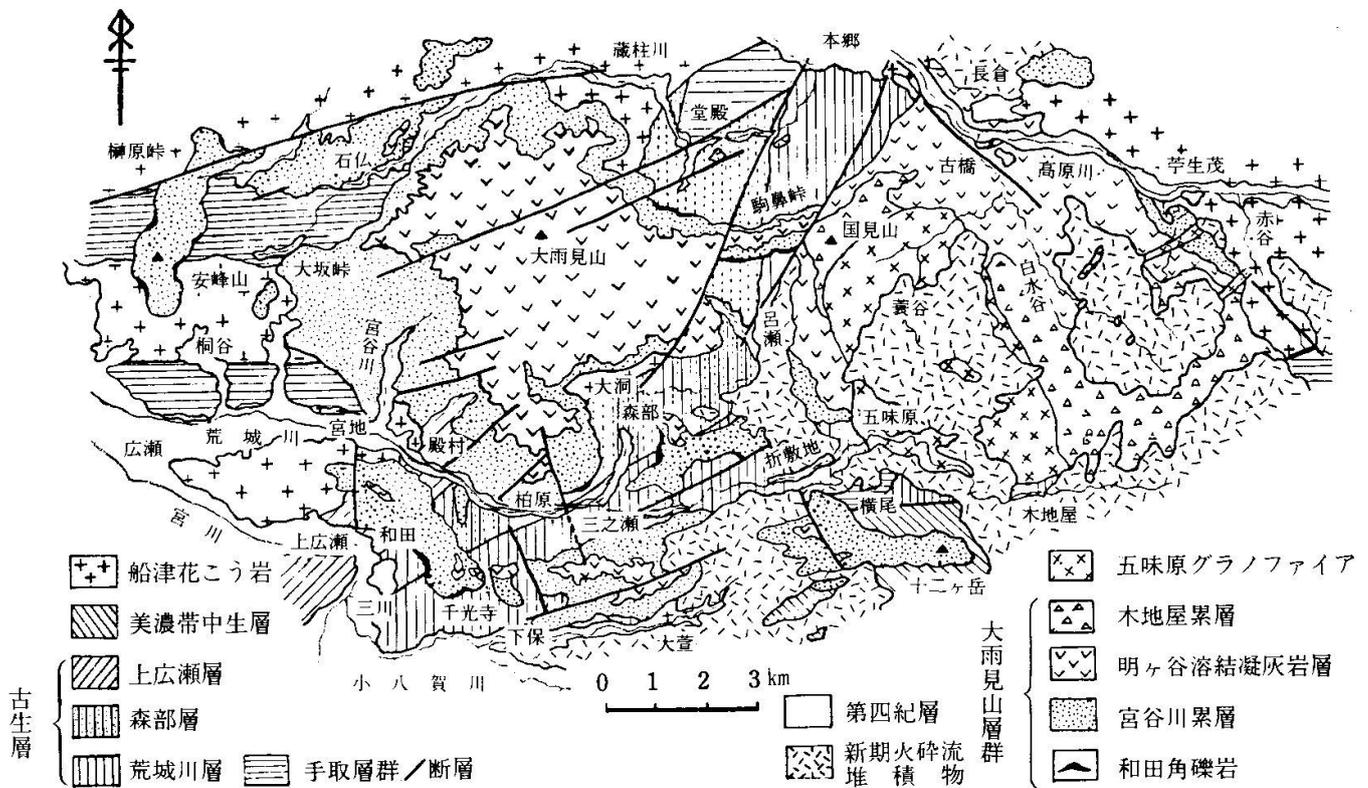


図4 大雨見山層群の分布（笠原、1988）



写真4 蓑谷大滝

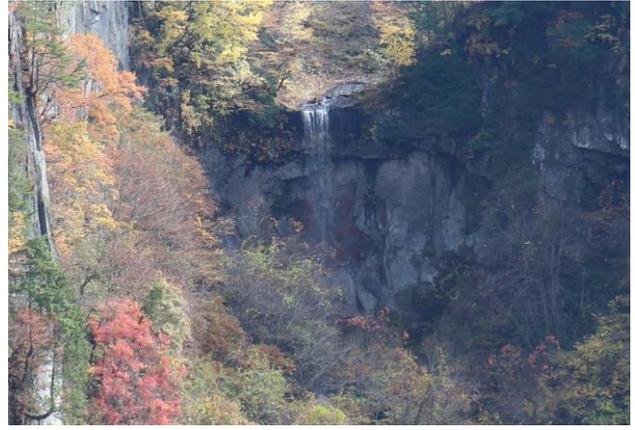


写真5 山屑滝（岩洞滝）

④ 蓑谷の三滝

蓑谷は、沢上谷上流部の地名です。その蓑谷上流部には3つの滝があり、あわせて蓑谷の三滝といます。3つの滝とも沢登りの技術が無くては近くに行けませんが、道路上から遠望できます。『ぎふの名瀑名峽』によると、右の沢上谷本流にかかる滝が箕谷大滝、真ん中が山屑（さんさい）滝（岩洞滝）、左が五郎七滝です。

『飛騨の山山やぶ山編』によると、蓑谷の住人の話では、真ん中の山屑滝をみそしる滝ともいいます。

みそしる滝の名は、滝の上にある大原の住人が味噌汁でも何でも捨てることによるとも、みぞの終りの「みそしり」からともいいます。五郎七滝は、この滝に誤って落ちて亡くなった村人の名前に由来します。

明治初期に刊行された『斐太後風土記』では、「山屑瀧（さんさいたき）、高さ二十間余、昔信州犀川に犀が住んでいた。今も飛騨深山に住んでいるというのはこれである。鼠餅村瀧ヶ平山中に在る」と記してあります。意味のわからない部分もありますが、山屑滝の名が出てきます。鼠餅村の奥地が蓑谷になります。

これらの滝は、すべて昇神滝と同じく、上宝火砕流の溶結凝灰岩を流れ落ちています。沢上川上流は、蓑谷、大原の台地を侵食しつつあり、台地の縁は崖になっています。その崖に、3つの滝ができています。また、この付近の地質の溶結凝灰岩は、火砕流堆積物が再結晶してかたい岩石で、崖をつくりやすい岩石といえます。

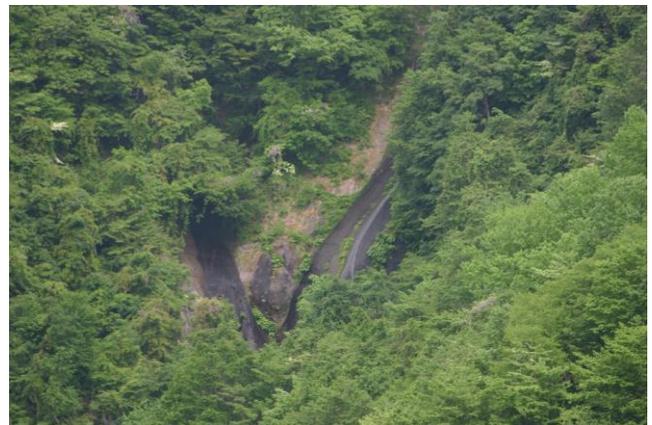


写真6 五郎七滝

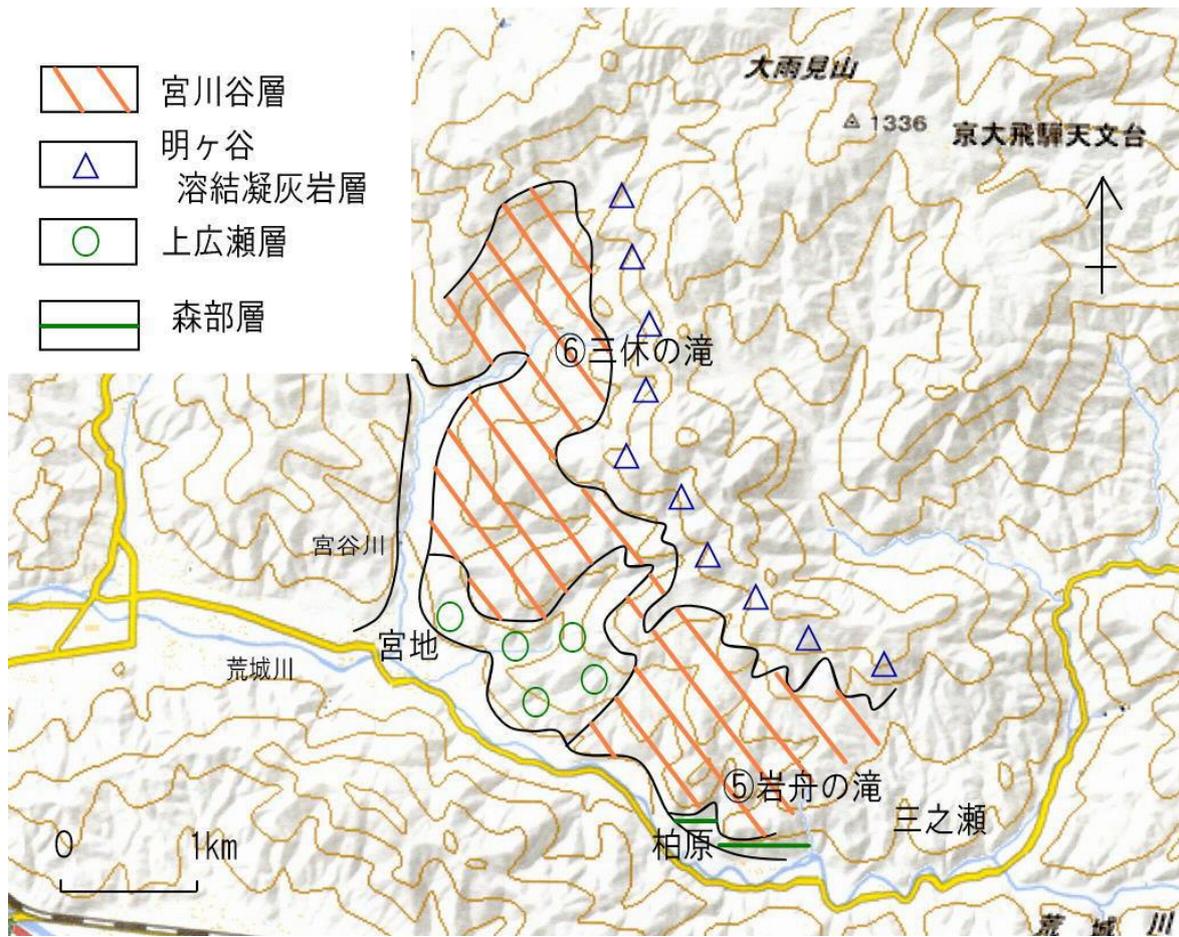


図3 柏原・宮地の観察地点と地質（地理院地図HPに加筆、地質はジオランドぎふHPによる）

⑤ 岩舟の滝

丹生川町柏原に、高さ約 30m の岩舟の滝があります。『ぎふの名瀑名峽』によると、水量が少ないため滝に打たれ祈ると、頭痛が治るといわれます。『東海の百滝紀行 I』では、眼病にも良いと伝えられます。江戸末期に記された『荒城俗風土記』によると、「不動滝 一名岩船瀧——高さ数十間にして巖々たる岩のさまいと面白く、其勝景たるや国内瀧と称するもの多といへ共、ならぶものなし。——」とあります。当時も今も水に打たれるための舞台があります。また、『斐太後風土記』では、「高山人・古川人納涼場也」とあります。



写真7 岩舟の滝

滝をつくる岩石は、鼠餅の大滝でも出てきた大雨見山層群のうちの宮川谷層です。宮川谷層は、流紋岩質溶岩層などからなり、部分的に玉ずい（石英の微小結晶）を含みます。また、所々崩れて崖を作っており、岩舟の滝がそのような崖にあります。

⑥ 三休の滝

国府町宮地の宮谷川上流に三休の滝があります。三段になっており落差は約40mあります。江戸末期に記された『荒城俗風土記』によると、「宮谷唐木谷の下三久と云所也。水落事、凡式拾間——荒城第二の瀧たる事、後二見定為に記ス。千聞一見にしかずと哉。」とあります。

滝を作る岩石は、岩舟の滝と同じく大雨見山層群の宮川谷層です。溶岩層の侵食に強い面が滝になっています。



写真8 三休の滝

参考文献

- 大坪二市 (1860) : 『荒城俗風土記』、国府史学会 (復刻版)
笠原芳雄 (1988) : 大雨見山層群、飛騨地学研究会編『飛騨の大地をさぐる』、教育出版文化協会
岐阜県林政部 (1994) : 『ぎふの名瀑名峽』、教育出版文化協会
小井土由光 (2011) : 『みの・ひだ地質99選』、岐阜新聞社
近藤紀巳 (2003) : 『東海の百滝紀行 I』、風媒社
酒井昭市 (1990) : 『飛騨の山山、ヤブ山編』、ナカニシヤ
富田礼彦 (1873) : 『斐太後風土記 (上巻)』、雄山閣 (復刻版)
長谷川忠崇 (1745) : 『飛州志』、岐阜新聞社 (復刻版)

ホームページ

ジオランドぎふ